

〔紫花物語若水二十八〕かくて中宮后威子神無月三年萬壽になりぬれば、左衛門督兼の家にいでさせ給ておはします略。中はかなくて月もたちぬ、十二月に成ぬれば、たちぬる月にだにさおはしますべかりしに、あやしく心もとなさを覺しさわぎたり、ついたりたちもすぎゆけば、いとあやしくいかにどのみおぼしめす程に、十日のひるつかたより、れいならぬ御けしきなれど、わざとも見えさせ給はねば、心のどかにおぼさるゝに、日くるゝまゝにぞまことにくるしげにおはします、このどのばらや、ほかの上達部もまゐりこみ給、こゝらの僧共のこゑをあはせたるほど、すべて物も聞えず、どの御まへ藤原道長なやましくおぼさるれど、こゑむまゐらせ給、内後より、女院后彰子より略の御つかひつゝきたちたり略。戌の時ばかりにぞいとたひらかにせさせ給へる子。章いまひとつの御ことをのゝしりたり、よろづにその事をもせさせ給、その後ありさまおとなきにておしはかられたり、どの御まへたひらかにおはしますよりほかの御事なし、物のみおそろしかりつるに、いのちのびぬるこゝちこそすれとて、うれしげにおぼしめしたり、うちにもきこしめして、おなじうはどはいかでか覺しめさゝらん、されどたひらかにおはしますを返々も聞えさせ給て、御はかしもて参りたり、さきくは女宮には御はかしはもてまゐらざりけれど、三條院御時、一品宮の生れさせ給へりしよりぞかく脱める、内女房などのあなくちをしなせ申をきこしめして、こは何事ぞ、たひらかにせさせたまへることかぎりなき事なれ、女いふもをどの事なりや、むかしこきみかど、みな女帝立給はずばこそあらめどのたまはするに、かしてまゐりて候べし、つぎくの御うぶやしなひなどもつゝきたちたり、

〔台記別記〕久安六年正月七日乙酉、今朝授入内女藤原頼長養次第於右大將實能卿、宰相中將教長卿、尾張守親隆朝臣等、賜教長卿者、爲令行事也、專行者親隆也、而先例如此大事、家司之外、授次第於親族上達部令行事、仍所授也、大將依爲外祖授之。